甘風(あまかぜ)に 暫(しば)しの夢を 返す酒
赤き葛花(くずはな) 我を呼び止む

令和三年八月二十七日

大中臣正比呂

心地よい晩酌に、つい、短い夢見を繰り返していたところ、
秋の風が甘い香りを運んできた。一体、何の香りであろうか。
窓を開け広げると、向こうに赤い葛(くず)の花が咲いていた。秋の草花だ。
「秋の色種(いろくさ)」は新橋の、あや姐さんが上手に踊っていたなあ。
三味線の合方(あいかた)が聞こえる夢の中で、ぼくを呼び止めた、
さっきの葛葉(くずは)ちゃんは誰なんだろう？

恋しくば尋ね来て見よ 和泉なる信太の森のうらみ葛の葉